近世日本における『老子』關連文獻について

博士後期課程二年　清水信子

はじめに

『老子』という文獻や、それに對する諸家の注釋書が、中國より日本に傳來した時期について、詳細な記錄はないが、平安時代成立の『日本國見在書目錄』には、河上公注・王弼注等『老子』の諸注が二十餘種[1]擧げられている。それらの中で日本において現存する最古の文獻は、鎌倉時代に書寫されたと思われる奈良聖語藏の河上公注本である。その他現存し、中世から近世にかけて書寫されたと思われる鈔本は、河上公注が多く[2]、近世以前の日本における『老子』は、概ね河上公注を中心として讀まれていたと思われる。

近世、出版事業が盛んになるに伴い、河上公注本や宋林希逸『老子鬳齋口義』（以下『口義』）の古活字本[3]が出版されたのを始めとして、その他の『老子』諸注も和刻され、またそれに續いて日本人による『老子』の注釋書も數多く出版されるようになった。それらの『老子』關連文獻について、内容形態・撰者・出版狀況等から、各特徵を概括すると、それは成立時期により、概ね三變すると思われる。それにより、本稿においては、江戸時代に入ってから明治にかけての近世という時代における『老子』關連文獻の變遷を、三期に區分し、各期の特徵やその變遷の理由について檢證していきたい。その間、各文獻の詳細や撰者についてはもちろん、各撰者はじめその周邊の學者の位置付けられた學派とその學風[4]、及び各文獻の成立した時代背景等を交えて、考察していく。尚、それに際しては本稿末【資料】の、日本において『老子』に關連すると思われる事項について年表形式にまとめた「近世日本における『老子』關連年表・『老子』關連人物生沒表」を隨時參照されたい。

一　第一期

慶長・元和期（一五九六～一六二三）頃に出版されたと思われる、河上公注本や『口義』の古活字本から始まる第一期の『老子』關連文獻の大きな特徴の一つに、既に中國において成立していた『老子』諸注の和刻本の出版が擧げられるであろう。それらには、河上公注・『口義』の他、承應二（一六五三）年初版明焦竑『老子翼』（以下『翼』）、明暦二（一六五六）年出版明何道全『太上老子道德經』、寛文一〇（一六七〇）年出版明釋德清『老子道德經解』がある。

それらの中で『口義』には、和刻本始めその他關連文獻が最も多く、和刻本では、古活字本・訓點本の他、林羅山・釋如一・德倉昌堅それぞれによる首書本や校本がある。また國字により注釋された文獻には、羅山に承應元（一六五二）年出版『老子鬳齋口義鈔』、貞享二（一六八五）年出版『老子抄解』の二種、山本洞雲に延寶九（一六八一）年出版『老子經諺解大成』があり、これらの『口義』關連文獻は、この時期に出版された『老子』關連文獻の中で多數を占める。これにより、當時の老子研究における『口義』の存在の一端が窺えるであろう。

しかし、その『口義』も、寶永六（一七〇九）年出版德倉昌堅首書本の後印本（幕末から明治にかけて出版されたと思われるが詳細な出版年代は不明）があるものの、正德五（一七一五）年出版『增益書籍目錄大全』の記錄[5]以降、新たに出版された形跡は見られない。『口義』は、この一轉する出版狀況から、第一期から第二期への移行において、鍵となる文獻と思われ、その出版の動向により第一期の範圍は、『增益書籍目錄大全』が出版された正德五年までとする。

日本における『口義』について詳察してみると、林羅山との關係[6]が深いようである。そもそもその關係は、羅山が

京都・五山の建仁寺での修學時代、『莊子』を林希逸の『鬳齋口義』により學んだことに始まる。[7]『老子』については、その時『莊子』と併せて學んだとの記錄はないが、現在内閣文庫に羅山舊藏の『老子』『列子』『莊子』の林希逸『三子口義』の明刊本や、『口義』が刊本として初めて出版された寛永四（一六二七）年より以前の元和四（一六一八）年に、羅山による跋のある『口義』鈔本が所藏されていることから、この時代以降學ぶ機會を得たものと思われる。その羅山の跋はそのまま、羅山首書本『口義』の跋に轉用されており、それには、

本朝古來、讀老莊列者、老則用河上公、莊則用郭象、列則用張湛、……未及至老子鬳齋口義、至於今、人海依河上、余嘗見道書全書、載老子數家注、又有老子翼有老子通、且又有林兆恩所解枚數、希逸視諸最爲優

とあり、『老子』諸注では、「道書全書」（明閻鶴洲編『道書全集』所載老子注のことか？）・『翼』[8]・明沈一貫『老子通』[9]等の中で、『口義』を最良のものとしている。

さて、この羅山の跋にもあるように、日本において、中世までの『老子』諸注の主流であったと思われる河上公注は、古活字本の出版以降和刻されていないが、寛文一〇（一六七〇）年初版陳元贅『老子經通考』は、『老子』經文、河上公注、元贅の補注と續く構成となっており、實質的に河上公注の和刻本となっている。しかしその他、河上公注に直接關連した文獻は出版されず、『口義』關連文獻の出版狀況から鑑みれば、その立場は、完全に『口義』へと移行していったようである。

第一期においてもう一つ触れておきたい文獻が、『翼』である。この文獻は、「采摭書目」として前人の諸注六十四家が擧げられているように、『老子』の集注本とも言えるものである。そのため、近世日本における老子研究においても、三期全體にわたって多く利用されていたと思われ、管見のそれら『老子』關連文獻の中に引用されている『老子』諸注と『翼』所引注とを比較してみると、同じ箇所で同じ諸注が引用されている例が多く見られる。前出の羅山

『口義』首書本・元贇『老子經通考』・洞雲『老子經諺解大成』いずれも、各所引注はこの『翼』から轉載しているものと思われる。

次に、當時の漢學界において、從來類別されている學派と『老子』及び關連文獻と各撰者との關係について見てみると、撰者では、羅山・元贇・洞雲が、程朱學派に位置付けられている。

この程朱學とは、五經に基づく漢唐の訓古學に對し、宋の程顥・程頤・朱熹による四書を中心に道德を唱えた學であり、いわゆる「宋學」と呼ばれるものである。日本においては、平安末から鎌倉初期にかけて、日宋の禪僧の往來により、宋元文化の輸入が促進され、それに伴い日本の儒學にも宋學が傳えられるようになった。水田紀久氏[10]によれば、なかでも新注書の傳來が、これまでの五經中心の古注の學を四書中心の宋學に大きく轉換させた、とされている。そして近世に至り程朱學は、藤原惺窩（一五六一～一六一九）により提唱され、幕府にも採用され廣く流布し、後に官學となり、寛政二（一七九〇）年には、程朱學以外の學問を禁じる「異學の禁」が發せられることとなった。

前述のような、羅山と『口義』との關係が、そのまま程朱學派と『口義』との關係に該當されるとは限らず、洞雲は、その『口義』をテキストとしているが、元贇は、『老子經通考』序に、

註家雖幾千百、猶不證實理矣、舊有河上公之章句、公是老子也、閣河公章句、而用希逸口義、是則非庸士理學之昏昧乎

とあり、『老子』諸注の中で河上公注を最良のものとしてテキストとし、『口義』については、批判的である。また『口義』始めその他の諸注に對しても、本編中に引用しつつも否定している場合が多く、全體的に批判的な態度で臨んでいる。

管見によれば、その他の學派における『老子』關連文獻の出版は確認されていない。しかし、古義學派とされる金

蘭齋[11]の『老子經國字解』は、蘭齋沒後、後藤維德（詳細未詳）が講義錄として整理し、第二期とする寶曆一一（一七六一）年に出版されたものであるが、蘭齋の講義は、生沒年から察するに、第一期中に行われていたものであり、これにより、第一期における蘭齋の『老子』に對する見解・研究方針等を窺い知ることができる。その中で蘭齋は、『口義』の解釋を採り上げて、批判している。例えば第六章に、

故ニ、林氏モ此所デバカリ、谷神ヲ象ニ由リテ說ク也、老子ノ主意ヲ見ル處ノ無キ故也、老子ノ主意ヲ見ント欲セバ、莊子ヲ熟讀スベキナリ、莊子ハ道家ノ二祖ニシテ、老子ノ道ノ書ヲ見テ傳ヘタキモノ也、故ニ老子ノ旨ヲ、莊子ノ書中デ解キテ、老子ノ養生シテ、命ヲ有ツコトハ、徒ニ命ヲ貪ツコトデハナイ、時命相戾ル故ニ、長生ヲ好ムト解イタナリ、然レドモ、諸學者不知也、ナレバ莊子程ノ注ハナイナリ、老子ハ谷神ト云ヒ、莊子ハ造化ト云フナリ、皆同ジコト也

とあるように、蘭齋は、『老子』を『莊子』により解釋しようとしたのに對し、『口義』は、卷頭の希逸「老子鬳齋口義發題」に、

獨潁濱起、而明之、可得其近似、而文義語脈未能盡通、其閒窒礙亦不少、且謂其多與佛書合。此却不然。莊子宗老子者也。其言、實異於老子。故其自序、以生與死與爲主。具見天下篇。所以多合於佛書。

と、潁濱（蘇轍）の『老子』解釋を批判しつつ、『老子』と佛書及び『莊子』を分けて理解しようとしたような、兩者の老莊の解釋の相違が見られる。

この古義學派とは、寬文年閒（一六六一～一六七三）、漢學の發達に伴い、新注を採用する程朱學に對して、根底を『論語』『孟子』に置き、孔孟の教えを直接その原典に據り究めようと、伊藤仁齋が起こした學派である。

またその他、江戸において荻生徂徠が起こした復古學派における、『老子』及びその諸注に對する見解を見てみる

と、まず徂徠は、文化元（一八〇四）年出版の自著『經子史要覧』（平竹溪編森河陽校）において、

其論面白キヤウナレドモ、無益ノ空言ナリ、其辯嘗テ二辨ニ出ス、老子古文辭ニテ解シ難シ、王弼コレヲ註ス、看ルヘシ、老子ノ末流多シトイヘドモ、禪子ノ醒悟ノ言ヲ混雑ス、故ニ古ヲ得ス、中ニ於テ、林希逸カ口義ハ、妄說杜撰太ダ多シ、必用ユヘカラス

とあるように、『口義』を批判し、魏の王弼注を推奨している。また、徂徠一派の逸話を記録した天明二（一七八二）年出版湯淺常山『文會雜記』には、

林希逸カ老莊ノ解ハアシ、ト云ヘリ（徂徠）……老子ノ注ドレカ老子ノ意ヲ得タルモ云カタシ。其中ニ王弼注何トヤラン簡古ニテ見ヨキヤウニ見ユル也（南郭）……金華獨ガ密ニサ、ヤキテ必希逸ガアシキニモ非シト云リ（金華）

とあり、徂徠の『口義』批判や服部南郭が王弼注を推奨している記錄、また一方では、平野金華の『老子鬳齋口義』擁護の記錄が殘されている。

この復古學とは、徂徠が程朱の宋學を排して、先秦の經・子といった原典にさかのぼって本義を究めようと唱えた學である。このような學風からすれば、宋學の流れにある林希逸による新注の『口義』は、自ずと批判される對象となったものと思われる。

以上、第一期の『老子』關連文獻について總括すると、既存の『老子』注の和刻本がその中心であり、それら以外の文獻であっても、『老子』を經文から解釋していくというより、既存の諸注をテキストとし、そこから『老子』を、言わば二次的に解釋したものであったと思われる。そしてその諸注には、圧倒的に『口義』が多く參考とされ、それは當時の老子研究の參考文獻として大いに用いられたようである。また一方では、批判の對象となっていたことも事

實である。以上のような、當時における『口義』の存在の相反する要因については、本稿においては言及しえないが、いずれにしても、この時期『老子』の注釋書と言えば、この『口義』が主流であり、無視できない存在であったようである。

また、このような時代にあって例外的な文獻も存在している。寛文七（一六六七）年出版三宅元泯『老子道德經會元』である。その「凡例」には、

諸子百家各見同異浩瀚、而不敢擧其紛紛、而以有多岐之惑也。……以章證章、以類語以文者、師（饗庭東菴）之解也。引諸經文句者、余（元泯）謬識管見也。

とあり、特に諸注は引用せずに解釋している。

二　第二期

まず第一期から第二期への移行への鍵となった『口義』について見てみると、新たな出版は見られないものの、依然として『老子』の注として主流であったらしく、例えば元文五（一七四四）年出版近藤蘆隱『老子答問書』の自序に、

此方にては虜齋の口義盛に行れ候。莊列も同事にて候。夫故此の老子者と聞へ候ものは多くは希逸流にて昆侖に棗を呑など申やうに虛無自然是老子の道なりと丸呑に合點して虛無とはいか成ること自然とはなにを以て名づけたるぞと推尋る輩まれにも無之候。河上翁流の老子者是亦稀に候。

とあり、また、延享五（一七四八）年出版渡邊蒙庵『老子愚讀』自序には、

今世人讀老子者、多賴林虜齋口義。

とあるようなことから、その存在位置の一端が窺える。

しかし、その『口義』の地位も次第に追われつつあり、代わって第一期では見られなかった新たな諸注が和刻されたり、參考文獻として用いられるようになった。

この時期の『老子』注和刻本には、王弼注に岡田贇（享保一七〈一七三二〉初版）と、この注を以前より推奬している復古學派に位置付けられていた宇佐美灊水（明和七〈一七七〇〉年初版）それぞれによる二種、延享三（一七四六）年出版唐陸德明『老子經音義』、明和七（一七七〇）年出版明陳繼儒『老子辯』がある。

和刻本以外の『老子』關連文獻について順に見てみると、享保一六（一七三一）年出版近藤蘆隱『老子本義』は、明邵弁『老子彙詮』をテキストとしている。『老子彙詮』は、和刻されておらず、中國における刊本も管見の漢籍目錄には著錄がなく、現在日本においての所在は不明であるが、蘆隱の他、安永二（一七七三）年に出版された釋敬雄『老子玄覧』においても、『老子』經文の校勘に用いられている。その他、前出の蒙庵『老子愚讀』の「讀老子一則」には、

邵氏之學、未知周氏乎、程氏乎、將陸氏乎、朱氏乎。余竊謂似本義多矣。……林鳳齋作老莊列口義、非不便於初學、然其誤解甚多矣。

とあり、邵弁の學統について不明とし、『老子本義』に対しても批判的である。そしてそれよりもっと批判の對象としているのが『口義』である。『口義』に對しては、第一期においても批判の聲はあったが、ここに至り、『老子』關連文獻中に、その批判が現れてきた。蒙庵は、「讀老子一則」の他にも本編中に『口義』の解釋を採り上げては、その誤りを指摘している。また、この書の末に付す太宰春臺「春臺先生與操書」にも、

足下（蒙庵）此撰、希逸氏見之、其將夜遁。痛快痛快。

とあり、春臺も『口義』には、批判的であった。この二者は共に、復古學派に位置付けられていたが、同學派ではその他、戸崎淡園に、安永二（一七七三）年出版『老子道德經正訓』と、これ以降の成立と思われる鈔本『老子道德經正訓附錄問義』があり、これらもまた、『老子』諸注を引用する中で『口義』に對して批判的である。但し、本稿において、以上の三者それぞれの批判の指摘箇所等の具體例については詳述を避け、また批判の要因等についても、各者と『口義』それぞれにおける『老子』解釋の本質を詳察して解明するべきであるため、次稿に讓るが、その三者が『口義』に批判的であった復古學派に位置付けられていたことも些か關係していることと思われる。また、そのように假定するならば、この時期に出版された『老子』關連文獻の撰者のそれぞれ位置付けられていた學派が、第一期において中心であった程朱學派から、復古學派に代わっていったというような點も、第一期から第二期にかけての『口義』の盛衰の推移に少なからず影響を及ぼしていると言えるのではないであろうか。

その他、この時期の『老子』關連文獻について、全般的な構成・特徴を概括すると、一つの『老子』注に偏らず、複數の『老子』諸注を引用し或いは參考にし、それらの解釋を基に、自說を展開していくという傾向になっているようである。また、その複數の諸注の引用に際しては、前述のとおり、『翼』が利用されていると思われる。

さてここで、第二期の範圍を定めなければならないが、次期との區分の基準となる文獻としては、太宰春臺が『老子』第三十一章までを注釋し、その後を宮田金峯が繼ぎ、天明三（一七八三）年に出版された『老子特解』が擧げられよう。春臺は、前出の蒙庵『老子愚讀』に見られるように、『口義』批判の立場にあったが、自著においては、自序に、

因用古訓、隨文解之、不依諸家舊說。

とあるように、これまでの『老子』諸注に據らず解釋するとしている。そしてこれ以降の『老子』關連文獻につい

て概觀してみても、このような解釋の方針が多いようである。これにより、『老子特解』が出版された天明三年を第三期の始めとし、第二期の範圍はそれ以前となり、『老子』關連文獻では、經文の解釋よりその考異に重點を置いている市川鶴鳴の安永六（一七七七）年成立の鈔本『老子考定素本』が下限となる。

以上に擧げた『老子』關連文獻の他、第二期において特筆すべき文獻としては、寛延四（一七五一）年出版張靜『老子是正』がある。撰者の詳細は未詳であるが、この書に序文を書いているのは、古義學派の伊藤竹里・伊藤蘭嵎の二者である。蘭嵎はその序で、

老聃、古者、實無其人。蓋莊周所創寓名。……今所傳、老子之書、何人所成耶、蓋戰國之末按秦聖猷否塞故人或襲莊子之意、并剽竊其語、以作老列二書而播諸後也。

としており、このように日本において「老子」という人物及び文獻を疑ったのは、この蘭嵎が初めてである。『老子是正』本編の内容としては、『老子』を兵書としてとらえていたようである。『老子』により兵法を解いたものには、寶曆七（一七五七）年に序文の書かれた岡崎良梁（詳細未詳）『老子兵解』がある。

三　第三期

第二期において既述のとおり、これまで多様な『老子』諸注を參考にしつつ發展してきた近世日本における『老子』關連文獻は、太宰春臺・宮田金峯『老子特解』が出版された天明三（一七八三）年以降、全般的に既存の『老子』諸注に據らず、各々獨自の方法で解釋を展開していく傾向が現れてきた。

第三期における『老子』關連文獻について詳察していくに先立ち、第二期の範圍にも溯るが、この時期の漢學界、及び時代背景について概觀してみる。江戸時代も後半に入ると、元文年間頃（一七三六～一七四一）を境に鎖國

が緩和され、それにより長崎を門戸として舶載される漢籍が增加していた。それらの中には清朝考證學の文獻も含まれ、その學風は、當時の日本の漢學界にも影響を與えたと思われる。この流れの中、新たに古注學・折衷學・考證學の三學派[12]が起こり、『老子』關連文獻においても、その三學派に位置付けられていた撰者によるものが出版されている。

この三學派は、清朝考證學を繼ぐものであり、それぞれ漢唐注疏の古注により經・史・子を解き、訓詁・考證・校勘・書誌等を重んじた。吉田篤志氏[13]は、當時のそれら三學派に通じる學風卽ち「考證學」について詳察されており、その興起の一因に、「徂徠復古學に對する反動」を擧げている。また、中田勇次郎氏[14]は、寛政二（一七九〇）年に發せられた「異學の禁」により、程朱學以外の學問は幕府により圧迫され、當時の漢學の傾向は專門的な校勘學・書誌學の方面へ赴くものが現れてくるようになった、とされている。

一方、中國では、日本の天明元（一七八一）年にあたる乾隆四十六年の序がある畢沅『老子道德經攷異』が出版され、それは、日本においても天保四（一八三三）年に和刻された。『老子』諸注の和刻は、安永三（一七七四）年に再刻された王弼注岡田本以來である。『老子道德經攷異』は、それが舶載された漢籍であったのか、和刻本であったのかは不明であるが、考證學派の大田晴軒の天保一三（一八四二）年出版『老子全解』の校勘等に、利用されている。

三學派について順に見ていくと、古注學は、漢唐注疏の古注により經・史・子を解きつつも獨自の理論を構築していこうと、京都において宇野明霞（一六九八～一七四五）が中心となり起こった。この學派の『老子』關連文獻は、寛政九（一七九七）年出版皆川淇園『老子繹解』を始めとして、管見によれば七文獻の現存が確認されている。それらの中で、中井履軒による成立年代不明の鈔本『老子雕題』は、隨所で『口義』を引用しているが、その他は、

例えば冢田大峯は、享和三（一八〇三）年序『老子道德經』の自序に、

解斯書者、王弼以下、則以文害意者多矣、唯謂河上公註者、以爲近焉、然亦太膚近、猶以爲得焉

とし、重野櫟軒もまた、文政四（一八二一）年出版『老子解』の自序において、

余爲此解、一意順文通之、言言相注、不混以他書義、亦於諸家說、不校得失、義意其大意所在、自與前人異也

としているように、概ね既存の『老子』諸注に據らず解釋しようとしている。また、東條一堂には、王弼注宇佐美本への書き入れ本があるが、卷頭に、

莫舊於王注。但王注今本亦多譌脫。……加諸書所援王注之言而校之。……然後據注推經。

とあり、王弼注本を『老子』の古の形に最も近いものとし、王弼注本を校訂し、その古い形にすることにより、正確な解を得ようとしている。

京都において起こった古注學に並び、江戸においては、明和安永期頃（一七六四～一七八〇）に、漢唐注疏の學を主に受けつつも、それに限らず程朱學等の諸學派の長短を折衷させ、自己の批判によって解釋しようとした折衷學が、程朱學派に屬していた林鳳岡（一六四四～一七三二）・井上蘭臺・井上金峨（一七三二～一七八四）等により起こった。吉田氏[15]は、折衷學派における學風について、「反徂徠を形成したわけであるが、その研究方法は徂徠學によって啓發され」、「特に折衷學の學者たちによって考證學の気運が高まった」とされている。この學派の『老子』關連文獻は、管見によれば五文獻の現存が確認されている。そのうち、廣瀨淡窓には、天保一二（一八四一）年出版『析玄』、その補訂版の嘉永二（一八四九）年初版『老子摘解』、そして成立年代不明の鈔本『讀老子』の三文獻があり、『析玄』では、獨自の「制數論」という論により『老子』を解釋している。[16]

折衷學派の門人であった大田錦城は、清朝考證學を受けて、訓詁の点においては漢唐の注疏を、義理の点において

は宋學等を採り入れ、考證學派を成した。錦城には、文政元（一八一八）年に成立したと思われる鈔本『老子妙皦』があり、その子晴軒には、前述のとおり畢沅『老子道德經攷異』を校勘に利用した『老子全解』がある。どちらも『老子』諸注からの引用はあるが、『老子』の他章の經文を參考に解釋し、『老子全解』では既存の『老子』諸注を引用しては、その非を指摘している。

もちろん、以上の他にも、從來の學派に位置付けられていたり、特にそれのない撰者による『老子』關連文獻も出版された。それらは、例えば、程朱學派では、葛西因是が、文化一三（一八一六）年出版『道德經輻注』の自序において、

焦竑所編纘可取讀之……古今義疏一切絶棄……廢八十一章爲廿六節

とし、既存の『老子』諸注は「絶棄」し、從來の八十一章という分章についても異說を唱え「廿六節」に分ける[17]など、齋藤拙堂は、嘉永年間頃（一八四八～一八五三）に成立したと思われる鈔本『老子辨』において、『老子』の思想面には触れず、その年代について考證し、復古學派では、海保青陵が、享和年間頃（一八〇一～一八〇三）に成立したと思われる鈔本『老子國字解』において、『老子』を『論語』により解釋しようとするなど、いずれも既存の『老子』諸注及び從來の『老子』に對する概念から脱却しようとする傾向が見られる。

四　まとめ

近世日本における『老子』關連文獻について、それらの注釋方針・構成といった内容形態、及び中國において成立した『老子』諸注との關係等から得た特徴は、成立時期の變遷に伴い、大きく見て三變したと思われ、それによりこれまで、『老子』關連文獻の變遷を三期に區分し、各期の特徴を見てきた。それらを含めた各期の老子研究の一端

について、以下に總括してみたい。

第一期は、主に『老子』諸注の日本への導入の時代であり、中では、『口義』が主流であった。第二期に入ると、いまだ諸注の主流であった『口義』に對して、批判の聲が多くなり、代わって、新たな諸注が和刻されたり、各自の解釋の參考となっていったようである。これにより、第二期は、既存の諸注を利用しつつも、そこから各自が解釋を求めていこうとする、『老子』解釋の模索から發展という時代に相當すると言えよう。第三期では、もはやそれらの『老子』諸注は飽和に達し、ある意味で食傷氣味であったのか、この時期の『老子』關連文獻の多くが、既存の『老子』解釋から脱却し、『老子』經文自體から、古訓により解釋していこうとする傾向となり、これにより、第三期は、『老子』解釋の原點に戻っていこうとする回歸の時代に相當する言えよう。

もちろん以上の三期の區分も、その境界が明確なわけではなく、それぞれ區分した時期に、他の區分に屬すると思われる文獻もある。また、本稿における『老子』關連文獻の變遷についての考察は、各文獻の出版狀況等書誌的な面を中心としたため、表面的な部分があるのは否めず、翻って『老子』に對する見解及び思想を主眼として究明するというように着眼點を變えてみれば、變遷の持つ内的必然性に迫ることもできよう。

また、『老子』關連文獻の特徵が三變した要因については、その一つに、各撰者の位置付けられていた學派及びその學風、そしてそれらを生み出した時代背景との關連性が擧げられるが、それら以外にも、當時の漢學者全體の思想性はもちろん、研究方法の推移との關連性も看過することはできない。それについては、『老子』關連文獻以外の經書や諸子等に關して研究した文獻について、それぞれ同時代における特徵等を併せて總合的に考察し檢討していく必要があり、上記の思想的檢討と併せて今後の課題としていきたい。

注

（1）小長谷惠吉『日本國見在書目錄解說稿　附　同書目錄・索引』（小宮山出版株式會社／一九五六年十二月初版一九七六年七月再版）所收「日本國見在書目錄」「道家」（一一頁）參照。

（2）近世初期にかけての河上公注本の流布狀況については、山城喜憲「天理大學付屬天理圖書館藏『老子道德經河上公解〔抄〕』翻印竝に解題（下）」（『斯道文庫論集』第31号／一九九七年一月）に詳しく、それによれば二十一點の河上公注鈔本がある。

（3）山城喜憲前揭論文によれば、河上公注古活字本には、一種七部があり、その他異植字版がある。また、『口義』古活字本には、管見によれば、五種がある。

（4）近世日本の漢學界における學派に關しては、それらに關して論じている資料によりその呼稱、各學派の境界、所屬する學者に異同がある。本稿における學派の呼稱・分類等は、關儀一郎・關義直編『近世漢學者傳記著作大事典』（井上書店・琳琅閣書店／一九六六年）に據り、その類別は「凡例」によると、「學派の名數は西島醇氏の儒林源流に類別せる程朱、敬義、陽明、古義、復古、古註、折衷の七種に考證學を加へて八種と爲せり」とある。これら當時の漢學界に關する問題について詳述すべき點は多數あるが、本稿における各學派の概要については、高田眞治『大觀日本文化史叢書　日本儒學史』（地人書館／一九四一年二月）、水田紀久・賴惟勤編『中國文化叢書9日本漢學』（大修館書店／一九六八年二月）「I日本漢學の展開」（一頁～二二頁）、野口武彦『荻生徂徠　江戸時代のドン・キホーテ』（中公新書／一九九三年十一月）を參考にし略述するにとどめる。

（5）著錄内容については、【資料】注（17）參照。

（6）近世日本における『口義』及び羅山とその關係については、大野出『日本の近世と老莊思想　林羅山の思想をめぐって』（ぺりかん社／一九九七年二月）に詳しく、それによると氏は、『口義』は、ある種詭辯を用いた解釋の方法により、『老子』の中の儒家思想への批判の矛先の方向をそらし、言わば儒家思想が『老子』を懷柔するという儒老合一的な解釋をしており、それが羅山を始め羅山以降の儒者にとって『老子』を受け容れやすいものとした、とされている。

（7）池田知久「日本における林希逸『莊子鬳齋口義』の受容」（『二松學舍大學論集』第31号／一九八八年三月）、栂野茂「近世における老子口義」（廣島支那學會『支那學研究』33／一九六八年）參照。

(8) 内閣文庫に、羅山舊藏萬曆一六年序刊本が所藏されている。
(9) 内閣文庫に、羅山手校萬曆二七年序刊本が所藏されている。
(10) 水田紀久・頼惟勤編前掲書同項「1、室町時代まで　1・4、鎌倉・室町時代　宋學の受容」(七頁)
(11) 高田眞治前掲書「第三章近世　第八節獨立派」(二一三頁)においては、金蘭齋について、「老莊學派の祖」とし、本稿において程朱學派とした葛西因是、復古學派とした海保青陵をこの學派に類別している。老莊學派について氏は、「單に老莊を研究するだけでなく、進んで孔・老二教の調和融合を力説するのがその特色」とし、「儒家的老莊派と稱するのが妥當」とされている。
(12) この三學派の呼稱及び境界についても、それらに關して論じている資料により異同があり、明確に定義しがたい。特に古注學派を設けていない資料は多く、本稿において同學派に位置付けている皆川淇園・冢田大峯・東條一堂等は、折衷學派に類別されている場合が多い。
(13) 吉田篤志「近世後期の考證學」(大倉精神研究所編『近世の精神生活』「第四章批判的精神と諸學の展開」所收／續群書類從完成會／一九九六年三月)(七七七頁)
(14) 水田紀久・頼惟勤編前掲書同項「2、江戸時代以後　2・2、江戸時代後半期　寛政異學の禁と漢籍の出版・蒐集」(一八頁)
(15) 吉田篤志前掲論文(七七九頁)
(16) 小島康敬「江戸思想史の中の老莊思想」(二九二頁～二九三頁)(源了圓・嚴紹璗編『日中文化交流史叢書3思想』所收／大修館書店／一九九五年十月)に、「形あるものにはすべて定められた『數』(昼夜の交替や人間の壽命に象徴される自然の攝理や運命)があるが、老子の『無』の教えは人がその『數』に『制せられる』のではなく、『數を制するの道』を說き明かしたものであるとの論を展開している」とある。
(17) その他、享保一六(一七三一)年出版近藤蘆隱『老子本義』、明和八(一七七一)年出版釋圓覺天『老子經』、享和年間頃(一八〇一～一八〇三)成立海保青陵『老子國字解』、文政四(一八二一)年出版重野櫟軒『老子解』は分章せず、寛延四(一七五一)年出版張靜『老子是正』は八十二章に、安永二(一七七三)年出版戸崎淡園『老子道德經正訓』は七十九章に、弘化三(一八四六)年鈔帆足西崦『老子』は八十三章に、それぞれ分けている。

付記

・引用に際して、表記は、正字に統一し、（　）内及び句讀點は適宜筆者が施した。

林道春（羅山、程朱）天正一一（一五八三）～――

陳元贇（程朱）天正一五（一五八七）～――

〔那波方[8]（活所、程朱）〕文祿四（一五九五）～――

出版・鈔写された『老子』關連文獻（＊＝關連事項）

第一期	
慶長・元和間	河上公注古活字本、宋林希逸『老子鬳齋口義』（以下『口義』）古活字本
寛永4(1627)	『口義』＊伊藤仁齋（古義）生
6(1629)	『口義』再刻
正保4(1647)	林羅山（程朱）首書『口義』
5(1648)	林羅山首書『口義』再刻
承應1(1652)	林羅山『老子鬳齋口義鈔』
2(1653)	明焦竑撰小出立庭點『老子翼』（以下『翼』）＊金蘭齋（古義）生
明暦2(1656)	明何道全『太上老子道經』＊榊原篁洲（折衷）生
3(1657)	林羅山首書『口義』增訂本＊林羅山(1583～）沒、那波活所（程朱、1595～)沒
萬治3(1660)	『口義』三刻
寛文4(1664)	釋如一點『口義』＊寛文中、伊藤仁齋により古義學起こる。
6(1666)	＊荻生徂徠（復古）生
	＊『和漢書籍目錄』(1)
7(1667)	三宅元泯『老子道德經會元』
9(1669)	林羅山『口義鈔』再刻
10(1670)	陳元贇（程朱）『老子經通考』、明釋德清『老子道德經解』＊『增補書籍目錄作者付大意』(2)
11(1671)	＊陳元贇(1587～)沒、釋如一(1616～）沒＊『增補書籍目錄』(3)
延寶2(1674)	德倉昌堅首書『口義』
8(1680)	陳元贇『老子經通考』再刻＊太宰春臺（復古）生
9(1681)	山本洞雲（程朱）『老子經諺解大成』
天和1(1681)	＊『書籍目錄大全』(4)
3(1683)	＊『新增書籍目錄』(5)
貞享2(1685)	林羅山『老子抄解』＊小出立庭（？～）沒、『改正廣益書籍目錄』(6)
元祿1(1688)	＊平野金華（復古）生
4(1691)	＊成島錦江（復古）生
5(1692)	＊伊藤竹里（古義）生、『廣益書籍目錄』(7)

釋如一（卽非）元和二（一六一六）～
〔伊藤維楨（仁齋、古義）〕
小出立庭（永安）（生年不詳）……
金德隣（蘭齋、古義）
山本泰順（洞雲、程朱）（生沒年不詳）
〔榊原玄輔[9]（篁洲、折衷）〕
〔荻生雙松（徂徠、復古）〕
太宰純（春臺、復古）
〔平野玄沖[10]（金華、復古）〕
〔成島鳳卿[11]（錦江、復古）〕
〔毛利瑚珀[12]（貞齋、程朱）〕（生沒年不詳）
〔高志利貞[13]（養浩、程朱）〕（生沒年不詳）
〔伊藤長準[14]（竹里、古義）〕

凡例

一、原則として、生沒表には、位置付けられる學派や生沒年の明確な人物、また生沒年が未詳であっても、撰述した『老子』關連文獻が現存している人物のみを、ほぼ出生順（生沒年未詳者については、各々撰述した『老子』關連文獻の成立及び出版年により推定）に、「姓名（字または號、位置付けられる學派）」の順に記載した。尚、再出以降及び年表には、字または號を記載した。各人物に關しては、關儀一郎・關義直編『近世漢學者傳記著作大事典』に拠る。

一、撰述したとされる『老子』關連文獻が、その記錄のみで現存未確認の人物、撰述ではなく序・跋等を寄せている人物、またその他、間接的な關係と思われる人物については、〔　〕内に記載し、**注**に、傳存する書名とその典拠、各文獻との關係を記した。また、成立年代の不明等により、撰述した『老子』關連文獻が年表に記載のない人物についても**注**に、書名を記した。

〔伊藤仁齋（古義）〕――
金蘭齋（古義）――
山本洞雲（程朱）（生沒年不詳）
〔榊原篁洲（折衷）〕――
〔荻生徂徠（復古）〕――
岩垣彦明[29]（龍溪、古注）――
市川匡（鶴鳴、復古）――
冢田虎（大峯、古注）――
〔松下壽[30]（葵岡、古注）〕――

元祿7(1694)	＊伊藤蘭嵎（古義）生
10(1697)	＊五井蘭洲（程朱）生、中村蘭林（程朱）生
12(1699)	＊『新版增補書籍目錄作者付大意』(15)
寶永2(1705)	陳元贇『老子經通考』三刻＊伊藤仁齋沒、井上蘭臺（折衷）生
3(1706)	＊榊原篁洲沒
6(1709)	德倉昌堅首書『口義』再刻＊瀧鶴臺（復古）生、『增補書籍目錄』(16)
7(1710) 正德5(1715)	＊宇佐美灊水（復古）生 ＊『增補書籍目錄大全』(17)
第二期	
享保5(1720)	＊澀井太室（程朱）生
13(1728)	＊荻生徂徠沒、齋宮靜齋（復古）生
14(1729)	＊戶崎淡園（復古）生
15(1730)	＊片山兼山（古注）生
16(1731)	近藤蘆隱『老子本義』＊金蘭齋沒
17(1732)	魏王弼注岡田贇首書『老子道德經附古今攷正・道德經付錄』（以下王弼注岡田本）＊平野金華沒、中井履軒（古注）生
19(1734)	＊皆川淇園（古注）生
20(1735)	＊宇野東山（復古）生
寬保1(1741)	＊岩垣龍溪（古注）生
元文5(1744)	近藤蘆隱『蘆隱先生老子答問書』＊市川鶴鳴（復古）生、この頃より鎖国の緩和に伴い舶載される漢籍は增加の傾向へ。
延享2(1745)	＊冢田大峯（古注）生
3(1746)	唐陸德明井上蘭臺校『老子經音義』
4(1747)	＊太宰春臺沒、松下葵岡（古注）生
5(1748)	渡邊蒙庵（復古）『老子愚讀』
寬延2(1749)	近藤蘆隱『老子本義徵』＊佐和莘齋（古義）生
3(1750)	＊三野象麓（復古）生
4(1751)	『翼』再刻、張靜『老子是正』
寶曆2(1752)	＊萩原大麓（古注）生、龜田鵬齋（折衷）生、山本北山（折衷）生

太宰春臺（復古）
〔平野金華（復古）〕
〔成島錦江（復古）〕
〔毛利貞齋（程朱）〕（生沒年不詳）
〔高志養浩（程朱）〕（生沒年不詳）
〔伊藤竹里（古義）〕
〔伊藤長堅[18]（蘭嵎、古義）〕
五井純禎[19]（蘭洲、程朱）
〔中村明遠[20]（蘭林、程朱）〕
井上通熙[21]（蘭臺、折衷）〕
瀧長愷[22]（鶴臺、復古）
宇佐美惠（灣水、復古）
渡邊操（蒙庵、復古）（生沒年不詳）
〔白石榮[23]（桃花洞、復古）〕（生沒年不詳）
〔澀井孝德[24]（太室、程朱）〕
〔齋宮必簡[25]（靜齋、復古）〕
戶崎允明（淡園、復古）
〔片山世璠[26]（兼山、古注）〕
中井積德（履軒、古注）
皆川愿（淇園、古注）
〔角田明[27]（青溪、古注）〕（生年不詳）
〔宇野成之[28]（東山、復古）〕
〔佐和淵[31]（莘齋、古義）〕
三野元密（象麓、復古）
〔萩原萬世[32]（大麓、古注）〕
〔龜田長興[33]（鵬齋、折衷）〕
〔山本信有[34]（北山、折衷）〕

〔成島錦江（復古）〕
〔伊藤竹里（古義）〕
〔伊藤蘭嵎（古義）〕
五井蘭洲（程朱）
〔中村蘭林（程朱）〕
〔井上蘭臺（折衷）〕
瀧鶴臺（復古）
宇佐美灊水（復古）

寶暦 3(1753)	＊馬淵嵐山（復古）生
4(1754)	＊大菅南坡(古義)生、『増補書籍目錄大全』(35)
5(1755)	＊海保青陵（復古）生、松本愚山（古注）生、仁科琴浦（折衷）生、柴田汶嶺（折衷）生
6(1756)	＊伊藤竹里沒
7(1757)	＊鎌田柳泓（程朱）生、釋雲室（復古）生
8(1758)	＊兼子天聾（折衷）生
9(1759)	＊久保筑水（古注）生
10(1760)	＊成島錦江沒
11(1761)	金蘭齋『老子經國字解』＊中村蘭林沒、井上蘭臺沒
12(1762)	＊五井蘭洲沒
明和 1(1764)	＊葛西因是（程朱）生
2(1765)	＊大田錦城（考證）生
7(1770)	魏王弼注唐陸德明音義宇佐美灊水校『老子道德眞經』、明陳繼儒『老子辯』
8(1771)	釋圓覺天『老子經卽釋注老子』＊龜井昭陽（復古）生
9(1772)	岡崎良梁『老子兵解』鈔
安永 1(1772)	＊伴東山（古義）生、明和安永閒頃折衷學起こる。
2(1773)	戶崎淡園『老子道德經正訓』、釋敬雄『老子玄覽』、混沌『老子道德經』、太田元九『王註老子國字解』 ＊瀧鶴臺沒
	戶崎淡園『老子正訓附錄問義』鈔
3(1774)	王弼注岡田本再刻
5(1776)	＊宇佐美灊水沒
6(1777)	市川鶴鳴『老子卽老子考定素本』鈔
7(1778)	＊伊藤蘭嵎沒、齋宮靜齋沒、帆足西崦（程朱）生、東條一堂（古注）生
第三期	
天明 2(1782)	＊三野謙谷（復古）生、廣瀨淡窓（折衷）生、片山兼山沒
3(1783)	太宰春臺宮田金峯『老子特解』、山口滄州『老子芻狗』
7(1787)	有木元吉『老子正義』＊萩原樂亭（古注）生

渡邊蒙庵（復古）（生沒年不詳）
〔白石桃花洞（復古學）〕（生沒年不詳）
〔澀井太室（程朱）〕
〔齋宮靜齋（復古）〕
戶崎淡園（復古）
〔片山兼山（古注）〕
中井履軒（古注）
皆川淇園（古注）
〔角田青溪（古注）〕（生年不詳）
〔宇野東山（復古）〕
〔兼子穆[40]（天聾、折衷）〕
岩垣龍溪（古注）
〔久保愛[41]（筑水、古注）〕
市川鶴鳴（復古）
葛西質（因是、程朱）
冢田大峯（古注）
太田元貞（錦城、考證）
〔松下葵岡（古注）〕
宮田明（金峯、復古）（生沒年不詳）
〔佐和莘齋（古義）〕
龜井昱[42]（昭陽、復古）
三野象麓（復古）
〔伴徒義[43]（東山、古義）〕
〔萩原大麓（古注）〕
東條弘（一堂、古注）
〔龜田鵬齋（折衷）〕
帆足萬里（西崦、程朱）
〔山本北山（折衷）〕
三野知彰[44]（謙谷、復古）〕
馬淵會通（嵐山、復古）
廣瀨建（淡窓、折衷）
〔大菅集[36]（南坡、古義）〕
萩原善韶[45]（樂亭、古注）
重野葆光（櫟軒、古注）（生沒年不詳）
海保鶴阜（青陵、復古）
松本愼（愚山、古注）
〔柴田央[37]（汶嶺、折衷）〕
仁科貞（琴浦、折衷）
〔釋了軌[38]（雲室、復古）〕
〔鎌田鵬[39]（柳泓、程朱）〕

〔澀井太室（程朱）〕
戸崎淡園（復古）
中井履軒（古注）
皆川淇園（古注）
〔角田青溪（古注）〕（生年不詳）
〔宇野東山（復古）〕
岩垣龍溪（古注）
市川鶴鳴（復古）

天明8(1788)	豐浦被褐『老子妄言』＊澀井太室沒、角田青溪（古注、？～）沒
寛政2(1790)	＊「異學の禁」施行により程朱學以外の學問は圧迫される傾向へ。
3(1791)	＊仁科白谷（折衷）生
7(1759)	＊大田晴軒（考證）生、市川鶴鳴沒
8(1796)	＊伊藤兩村（程朱）生
9(1797)	皆川淇園『老子繹解』＊宮永虞臣（程朱）生
11(1799)	＊齋藤拙堂（程朱）生、野澤岐山（折衷）生
享和1(1801)	＊柴田汶嶺沒
3(1803)	冢田大峯『老子道德經』
	海保青陵『老子國字解』鈔
文化3(1806)	＊戸崎淡園沒
4(1807)	＊皆川淇園沒
5(1808)	＊岩垣龍溪沒
6(1809)	金蘭齋『老子經國字解』再版、三野元密『老子經古義』
7(1810)	釋俊國『老子道德經發蒙』
	馬淵嵐山『老子製文』『老子贅話』『老子絶學』鈔
8(1811)	＊萩原大麓沒
10(1813)	仁科琴浦『老子解』
	東條一堂『老子標識』鈔
	中井履軒『老子雕題』鈔
11(1814)	＊仁科琴浦沒、大菅南坡沒
13(1816)	葛西因是『道德經輻注』＊宇野東山沒
14(1817)	高橋華陽『老子道德經解』＊海保青陵沒、中井履軒沒
	高橋華陽『老子道德經證假字解』
文政1(1818)	大田錦城『老子妙皦』鈔
4(1821)	重野櫟軒（古注）『老子解』＊鎌田柳泓沒
5(1822)	＊山本北山沒
6(1823)	＊葛西因是沒、松下葵岡沒
	松本愚山『老子評註』
	中田琇瑩『老子證註』

冢田大峯（古注）
〔松下葵岡（古注）〕
〔佐和莘齋（古義）〕―澤田師厚[46]（眉山、復古）（生年不詳）……
三野象麓（復古）―阪尾清風[47]（復古）（生沒年不詳）
〔萩原大麓（古注）〕
〔龜田鵬齋（折衷）〕―〔中井豐民[48]（乾齋、考證）〕（生沒年不詳）
〔山本北山（折衷）〕
馬淵嵐山（復古）―大田敦（晴軒、考證）
〔大菅南坡（古義）〕
重野櫟軒（古注）（生沒年不詳）
海保青陵（復古）
松本愚山（古注）―〔伊藤逸彥[49]（兩村、程朱）〕
〔柴田汶嶺（折衷）〕
仁科琴浦（折衷）
〔釋雲室（復古）〕
〔鎌田柳泓（程朱）〕
〔兼子天聾（折衷）〕
〔久保愛（筑水、古注）〕
葛西因是（程朱）
大田錦城（考證）
龜井昭陽（復古）
〔伴東山（古義）〕
東條一堂（古注）―〔宮永大倉[50]（虞臣、程朱）〕
帆足西崦（程朱）―齋藤正謙（拙堂、程朱）
三野謙谷（復古）―〔野澤翹[51]（岐山、折衷）〕
廣瀨淡窓（折衷）
萩原樂亭（古注）
仁科幹（白谷、折衷）

大田錦城（考證）
冢田大峯（古注）
〔佐和莘齋（古義）〕
三野象麓（復古）
〔龜田鵬齋（折衷）〕

文政 8 (1825)	＊大田錦城沒
9 (1826)	＊龜田鵬齋沒
10(1827)	＊釋雲室沒
12(1829)	＊萩原樂亭沒、兼子天聾沒
天保 2 (1831)	＊佐和莘齋沒
3 (1832)	＊冢田大峯沒、伴東山沒
4 (1833)	清畢沅『老子道德經攷異』＊久保筑水沒
5 (1834)	＊松本愚山沒、龜井昭陽沒
6 (1835)	＊野澤岐山沒
7 (1836)	＊馬淵嵐山沒
11(1840)	＊三野象麓沒
12(1841)	廣瀨淡窓『析玄』
13(1842)	大田晴軒『老子全解』
弘化 2 (1845)	＊仁科白谷沒
3 (1846)	帆足西崦『老子』鈔
嘉永 2 (1849)	廣瀨淡窓『老子摘解』
	廣瀨淡窓『讀老子』鈔
	齋藤拙堂『老子辨』鈔
5 (1852)	＊三野謙谷沒、帆足西崦沒
6 (1853)	＊澤田眉山（復古、？～）沒
安政 2 (1855)	＊宮永虞臣沒
3 (1856)	＊廣瀨淡窓沒
4 (1857)	＊東條一堂沒
5 (1858)	廣瀨淡窓『老子摘解』再刻
6 (1859)	＊伊藤兩村沒
明治 3 (1870)	＊齋藤拙堂沒
6 (1873)	＊大田晴軒沒

馬淵嵐山（復古）
松本愚山（古注）
〔釋雲室（復古）〕
〔兼子天聾（折衷）〕
〔久保筑水（古注）〕
龜井昭陽（復古）
〔伴東山（古義）〕
東條一堂（古注）
帆足西崦（程朱）
三野謙谷（復古）
廣瀬淡窓（折衷）
萩原樂亭（古注）
仁科白谷（折衷）
澤田眉山（復古）（生年不詳）
阪尾清風（復古）（生沒年不詳）
〔中井乾齋（考證）〕（生沒年不詳）
大田晴軒（考證）
〔伊藤兩村（程朱）〕
〔宮永虞臣（程朱）〕
齋藤拙堂（程朱）
〔野澤岐山（折衷）〕

【資料】注

(1)〔寛文六年頃〕刊。各書籍目錄著錄事項は、原則として、「　」内に書名のみを、著錄通りに記載したが、字體は正字に統一した。丸括弧内は筆者注である。「老子經」「同首書」「同道春點」「同無垢子註」(何道全『太上老子道德經』以下同)「同義解」(釋德清『老子道德經解』?以下同)「同鈔」「老莊翼」

(2)「老子經」(又「鬳齋林希逸注」とあり、林希逸彦『老子鬳齋口義』)「同頭書」(又「林道春」とあり、林羅山『口義』首書本)「同無垢子註」「同無垢子抄」「同會元」(三宅元泯『老子道德經會元』以下同)「同義解」「老莊翼註」

(3)同注(2)『增補書籍目錄作者付大意』著錄事項。

(4)「老子經」(又「林希逸注」とあり、林希逸『老子鬳齋口義』)「同首書」(又「林道春」とあり、林羅山『口義』首書本)「同新板頭書增補」「同鈔」(又「林道春」とあり)「同無垢子」「同義解」「同會元」「同道德經」(又「釋德清」とあり、『老子道德經解』のことか?)「老莊翼註」

(5)延寶三年刊天和三年改修。同注(4)『書籍目錄大全』著錄事項。

(6)延寶三年刊貞享二年修。「老子經口義」(林希逸『老子鬳齋口義』)「同頭書」(又「無點林道春考點付ハ尚賢考」とあり、羅山『口義』首書本・德倉昌賢『口義』首書本の二書のことか?)「同增補首書」(又「尚賢」とあり、德倉昌賢『口義』首書本)「同義解」「直註」(又「…毛利虛白訓點」とあり、毛利貞齋『老子直註』)「無垢子註」「同河上公注」「同會元」「同抄」(又「諸說ヲ拾ヒ和語ヲ以テ解」とあるが、該當文獻不明)「老莊翼註」「老子經詳議」「同諺解大成」(又「井上昌立」とあり)「頭書大極圖說」「同首書」(又「熊谷立安」とあり)「同鈔」(又「元甫」とあり)「同諺解」(又「洞雲」とあり、山本洞雲『老子經諺解大成』)

(7)同注(6)『改正廣益書籍目錄』著錄「老子經口義」至「老子經詳議」。また「同諺解大成」(又「榊原玄甫」とあり)

(8)『老莊叢話』(關儀一郎・關義直『近世漢學者傳記著作大事典』より)

(9)『老子經諺解大成』(元祿五年刊『廣益書籍目錄』より)

(10)近藤蘆隱『老子本義』序

(11)近藤蘆隱『老子本義徵』序

(12)『老子直註』(延寶三年刊貞享二年修『改正廣益書籍目錄』より)

(13) 金蘭齋『老子經國字解』序
(14) 張靜『老子是正』序
(15) 同注（6）『改正廣益書籍目錄』著錄「老子經口義」至「老莊翼註」及び「同諺解大成」（又「井上昌立」とあり）
(16) 元祿九年刊寶永六年增修。注（6）『改正廣益書籍目錄』とほぼ同じで、「老子經口義」「同卽非註」「同增補首書」「同義解」「直註」「無垢子註」「同河上公注」「同鈔」（又「林道春」とあり）「同會元」「同諺解大成」（又「榊原玄甫」とあり）「老莊翼注」
(17) 元祿九年刊正德五年修。注（15）『增益書籍目錄』とほぼ同じで、「老子經詳議」が加わる。
(18) 張靜『老子是正』序
(19) 鈔本『老子經講義』
(20) 『老子考證』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(21) 唐陸德明『老子經音義』校（長澤規矩也『和刻本漢籍分類目錄』より）
(22) 鈔本『老子抄』
(23) 『老子後傳』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(24) 『老子通義』（關儀一郎・關義直前掲より）
(25) 『老子贅語』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(26) 『老子類說』他（關儀一郎・關義直前掲書より）
(27) 『老莊同異考』他（關儀一郎・關義直前掲書より）
(28) 『老莊國字辨』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(29) 鈔本『老子國字解拔萃』
(30) 『老子解叢』（嚴靈峯『老列莊三子知見書目』より）、重野櫟軒『老子解』序
(31) 『讀老子』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(32) 『老子考』（關儀一郎・關義直前掲書より）
(33) 『老子愚說』他（關儀一郎・關義直前掲書より）

(34)『老子一斑』(嚴靈峯前掲書より)
(35)「老子經王弼注」(又「岡田權兵衛句讀」とあり)「同楊起元註」「同音義」(又「陸德明」とあり)「老子辨」「愚讀」(渡邊蒙庵『老子愚讀』)「同本義」(近藤蘆隱『老子本義』)「同本義徵」(近藤蘆隱『老子本義徵』)「是正」(張靜『老子是正』)「同答問書」(近藤蘆隱『老子答問書』)
(36)『老莊列韓考』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(37)『老子道德經』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(38)『老子解意』(嚴靈峯前掲書より)
(39)『老子鑑』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(40)『老子折中』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(41)『老莊合解』他(關儀一郎・關義直前掲書より)
(42)鈔本『老子考』
(43)『老子解』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(44)『老子記聞』(『國書總目錄』より)、三野象麓『老子經古義』序
(45)『老子考』(嚴靈峯前掲書より)
(46)鈔本『老子筌』
(47)鈔本『老子古傳』
(48)『老子詳解』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(49)『老莊考』(關儀一郎・關義直前掲書より)
(50)『老子連山歸藏』(嚴靈峯前掲書より)
(51)『老子發揮』(關儀一郎・關義直前掲書より)